

生き長らえて、ポストヒューマンになりたいと願うわけ

ニック・ボストロム

私はよく想像する——もし、1時間だけ天使になれて、この世に戻ってきたら？ たとえ世界で最も荣誉ある玉座に座れても、おぞましい地下牢や墓場に身を落としたときに感じる以上の嫌悪感と抵抗感を抱くのではないだろうか。

ジョージ・パークリー (1685–1753) ^{註1}

1. 議論の舞台を整える

「ポストヒューマン」という言葉は、使う人それぞれに異なる意味で用いられてきた^{註2}。私としては、この言葉は明確さよりも混乱を招くので、別の言葉に替えたほうがよい、という意見に賛成である。しかしながら、このエッセイの目的は、用語の改善を提案することではなく、それなりに実質的で規範的なテーゼ（そうしたテーゼはごく自然に、「ポストヒューマン」のレッテルが貼られた文献の中に見つかるだろう）を論ずることなので、私自身が「ポストヒューマン」に与えている意味を説明することで、世の理解を深めたいと思う。確かに、この種の用語上の説明は、有意義な議論——ポストヒューマンになることは、我々にとって良いことかどうか——を行うための必要最低限の前提条件だろう。

私はポストヒューマンを、少なくともポストヒューマンの能力のひとつを有する存在として定義する。このポストヒューマンの能力とは、現代人が最新のテクノロジーに頼らずに到達する最大能力をはるかに凌駕する、人間の核となる基本能力のことである。人間の核となる基本能力とは、以下のものである。

- 健康寿命——精神のおよび身体的に、十分に健康的、活動的、生産的な状態を維持できる能力
- 認識力——一般的な知的能力（たとえば記憶力や、演繹的で類推に基づいた推理を行って対応できる能力、注意力など）、さらには特殊な能力（音楽、ユーモア、エロチシズム、叙述、精神性、数学などを理解して楽しむ能力）
- 感情能力——人生を享受し、適切な情動をもって他者や状況に反応する能力

人間の核となる基本能力を以上の3つに限ったのは、人間とポストヒューマンにとって他の能力は基本的に重要ではない、という意味ではない。ここで強調しておきたいのは、これら3つの能力は、互いに極めて異なる独立した能力である、ということだ。確かに、感情と認識力はいくつかの面で重複している。しかし、私がポストヒューマンという言葉で何を言いたいかを示すための、大まかな概念として、これら3つの能力を挙げれば役立つだろう。

このエッセイで、私は主に2つのテーゼを提案するつもりだ。第1のテーゼは、ポストヒューマンが存在するとしたら、その存在様態は素晴らしいものとなるだろう、ということだ。ポストヒューマンにとって可能な存在様態のすべてが素晴らしいわけではない。人間の存在様態の中にも悲惨で恐ろしいものがあるのと同じことだ。しかし、ポストヒューマンの素晴らしい可能性を示すことができれば、それはとても興味深いだろう。まずは、その可能性を理解することを目指そうではないか。

第2のテーゼは、我々がポストヒューマンになれるとしたら、とても素晴らしいだろう、ということだ。〈我々が〉を抜かして、単に「ポストヒューマンになるのは良いことだ」と考えることも可能だ。この第2のテーゼは、第1のテーゼを超

えた先にある。私が「我々にとって良い」という言い方をしても、それは「今日の人間全員にとって望ましいポストヒューマンの存在様態があり得る」という意味ではない。私の主張は例外が可能な、縛りの緩いものだ。今日のほとんどすべての人間にとって、何らかの方法で実現できる、望ましいポストヒューマンの存在様態が存在する、と私は言いたいのである。

そこで、ポスト人類の望ましさについて、もっと幅広く論じながら議論を進めることにしたい。ポスト人類に反対する人々は、我々自身や我々の子孫をポストヒューマンにするような改良を求めるべきではない、と主張している。ポスト人類への反対論には、少なくとも5つの異なるレベルがある（コラム3.1参照）。このエッセイは、レベル3と4に焦点を絞っている。実現の可能性、コスト、リスク、副作用、社会的影響などの問題は、とりあえず脇に置いておく。総合的に考えれば、これらの問題が重要であることは明らかだが、ここでは言及しないことにする。

さらにいくつかの用語について、順番に説明したい。〈存在様態〉とは、生命体の能力と、その他一般のパラメータを意味する。ポストヒューマンの存在様態は、少なくともポストヒューマンの能力のひとつを含むものである。

では、特定の存在様態の価値について話そう。価値の担い手は、存在様態以外の何かだと考える人もいるかもしれない。たとえば、精神状態、主観的な体験、活動、好みと満足感、業績、独自の生き方などである。そうした考え方は、このエッセイと合致している。私が擁護する姿勢は、多種多様な形式的で実質的な価値論と調和している。話を簡潔にわかりやすく進めるために、存在様態の価値について論ずるが、その際に議論の対象となるような特定の価値論を支持するつもりはない。

コラム3.1 ポスト人類に反対するレベル

レベル0.〈できるはずがない〉

ポストヒューマンを創造することは、現在も将来も不可能または実行不可能だという、経験主義的主張に基づく反対。

レベル1.〈難しすぎる／費用がかかる〉

人間をポストヒューマンに変える、もしくは新しいポストヒューマンを創造するという試みは、危険すぎて、費用がかかりすぎて、精神的に煩わしいという、経験主義的主張に基づく反対。医学的な副作用に関する懸念はこのカテゴリに入る。また、ポストヒューマン実現のために必要な研究や医療が、他のより重要な分野から財源を奪うのではないかと懸念もある。

レベル2.〈社会に対する悪影響が大きすぎる〉

ポストヒューマンの創造に成功した後には生ずる社会的な影響、たとえば社会的な不平等、差別、人間とポストヒューマン間の対立などが懸念されるという、経験主義的主張に基づく反対。

レベル3.〈ポストヒューマンの人生は、人間の人生よりも悪い〉

人間の人生の価値とポストヒューマンの人生の価値を比較する、教条的な主張に基づく反対。

レベル4.〈何の利益にもならない〉

変化の主体(自らポストヒューマンになろうとする人間、ポストヒューマンを誕生させようとする人間)への反発。ポストヒューマンの人生は、人間の人生と同等もしくはそれ以上に素晴らしいかもしれないが、ポストヒューマンになることも、ポストヒューマンを創造することも、人間にとって悪いことだという主張。

我々は、存在状態の裏付けとなりそうな具体例の価値を判断することで、代替的に存在状態の〈価値〉を判断することがある。そういうやり方では、いくつもの不確実性が生じるだろう。さまざまな生き様が、ある存在状態の裏付けに使われると(それが特徴のある存在状態ならなおのこと)、人によって善し悪しが変わってしまう。そんな存在状態に価値など見出せるのだろうか。

この懸念を別の言い方で表現すると、特定の存在状態の具体例を挙げる価値は、状況によって左右される、ということだ。ある状況では、価値は高いかもしれないし、別の状況では低いかもしれない。世間から価値を認められていないものについて議論することも有益である。たとえば、健康でお金に恵まれていることには価値がある、と言えるだろう。しかし、健康もお金も、人生の価値に有益な影響を与えるという保証はない。逆もまた真なり、という状況はある。たとえば、お金があっただけに強盗に遭って殺される、病知らずの健康な小説家は凡作ばかりで傑作は書けない、ということもある。しかしそれでも、お金も健康も良いものだ——本質的な価値がある、あらゆる状況で価値を発揮する、とまでは言えなくても、「価値がある」とは単に、「〈通常の場合〉人生の価値に対して肯定的な貢献をするだろう」くらいの意味でしかない。実にさまざまな、もっともらしい状況で、価値は付与される。この平凡な意味は、存在状態が価値を持っていることについて話すときに、私が考慮することである。すなわち、妥当な状況という極めて広い枠組みの中で、その存在状態の具体例を示す生き方は、その存在状態の価値を内包しているだろう、ということだ³。

人生というものは因果関係に左右されて、良くも悪くもなるだろう。あるいはその生き方が、社会や世間一般の価値に貢献できるだけの影響力を発揮できるかどうか、人生の善し悪しを決めるだろう。しかしこのエッセイでは、人生を生きる本人にとっての価値に焦点を絞る——つまり、本人にとって自分の人生が良いか悪いかだ。〈幸福〉という言葉は、多くの場合、そういう意味で使われる⁴。

人生の価値について論じる際は、その人生が道徳的にどうであるかについては言及しない。人間とポストヒューマンにとって、道徳的であるとはどのようなことかは、別個の問題である。このエッセイの目的に沿って、道徳的であることは、人間とポストヒューマン双方にとって

同じであると仮定することもできる。人生の価値は、むしろ、本人にとってどれほど幸せな人生であるかに関わっている。幸せは人それぞれであり、そういう意味では、人生の価値もさまざまである。社会から孤立して貧困のうちに病気に苦しみながら15歳で死ぬ人生は、典型的な不幸な人生であり、友人や愛情に恵まれて価値ある業績を残せた80年間の喜びと創造性に満ちた人生に比べれば価値が低いだろう。どんな専門用語を用いて違いを説明したところで、後者の人生のほうが生きる価値があることは明白だ。後者の人生のほうが前者の人生よりも価値がある、と言い切るしかない⁵。その一方で、対照的な人生を送った2人の人間に対して同じ道徳を当てはめることには、整合性がある。

あまりにも違いすぎる2人の人生の価値を比べることは難しく、おそらくは不可能だろう。2人の人生に優劣があるのか、それとも同等なのかという問題——つまり2人の人生の価値は同一の規準で計ることができるのかという問題——は、脇に置くとして、少なくとも、一方が他方よりも明らかに素晴らしいと、仮定することはできるだろう。

ポストヒューマンになるとは、どのようなことなのかについて、もう少し具体的なイメージを思い浮かべるために、そのプロセスがどのように展開するかを描写してみよう。

2. ポストヒューマンになる

自分がポストヒューマンの健康寿命、認識力、感情能力を持つ存在に進化すると思ってみよう。この進化のプロセスが始まるとすぐに、強化された能力を享受することができる。健康状態は改善し、より強く、よりエネルギーに、よりバランスの取れた体になる。肌は若々しく、しなやかになる。膝の不調が治る。頭脳は冴えわたる。以前よりも集中して難しい仕事に取り組めるようになり、仕事への理解も深まる。以前はわからなかった関連性が理解できる。そして自分がいかに多くの事柄を、よく考えたり根拠を確かめたりもせずに信じていたかに気がついて驚く。以前よりも順序立てて考え、思考の足掛かりを失うことなく、難しい議論にもついていけるようになる。人の名前や事実、以前に考えたことを、必要なときはいつでも思い出せる。人と話をするときは、気の利いた意見を述べ、鋭い

ジョークを飛ばすことができる。友人から、一緒にいると楽しいと褒められる。体験をより生き生きと感ずることができる。以前は気にも留めなかった音楽の構造や音楽理論を理解できるようになり、音楽を聴くのがとても楽しくなる。以前から読んでいたゴシップ雑誌は相変わらず面白いが、読み方は変わってくる。ブルーストの小説や『ネイチャー』誌のような難しい本も、もっとよく理解できるようになる。人生の一瞬一瞬が大切になる。情熱をもって仕事に取り組むようになる。愛する人々をより深く愛するようになる。それでも、ときには不機嫌になることも怒ることもある——そうすることが正当であり、建設的であるときは。

自分自身が変わるにつれて、時間の使い方も変わる。毎日テレビを見ながら時間を費やす代わりに、ジャズバンドでサクスを演奏し、小説の執筆に挑戦する。週末にバブで昔馴染みとサッカーの試合を話題にする代わりに、スポーツよりも重要に思えるようになった事柄について、新しい友人と語り合う。そうした新しい友人と一緒に、政治犯の苦境への関心を高めることを目指す非営利の国際組織の地方支部を立ち上げるかもしれない。

合理的に考えて、ポストヒューマンへの最初の一步を踏み出せば、人生は向上する。しかし、ここまでは人間らしい自然な範囲での能力の向上であり、人間文化のなかで意義深い会話を交わす仲間を見つけるといった点が変わっていない。そこで次は、変身プロセスのより高度なステージについて考えてみよう。

170歳の誕生日を迎えたあなたは、ますます意気軒高としている。毎日が楽しくてたまらない。あなたが創造した新しい芸術は、あなたが発達させた新しい認識力と感受性を生かすものだ。もちろん音楽は聞いている——でも、音感が高度に発達して、モーツァルトが陳腐なBGMに聞こえてしまうが。あなたは同時代の人々と言語を使ってコミュニケーションを取っているが、その言語は過去1世紀の間に英語を基にして発展したものだ。その語彙力と表現力のおかげで、あなたは思考や感情——能力を拡張していない人間たちは、考えたことも経験したこともない思考と感情——を共有し、議論することができる。あなたが楽しんでいるゲームは、バーチャル・リアリティを介した芸術的な表現、ダンス、ユーモア、人間関係学、さまざまな新しい機能、そして

発展途上の現象を組み合わせたものだ。このゲームは、あなたが生まれてから100年の間に体験した、どんなゲームよりも楽しい。友人たちとゲームに興ずるとき、あなたは最大限の独創性と想像力を発揮しようとして、肉体と精神の組織が限界まで拡張するのを感じる。あなたは人類がそれまで(具体的に)想像したこともないような、新たな抽象美と具象美の領域を開拓しているのだ。あなたは常に、不幸に苦しむ人々を思いやり、彼らが立ち直るのを助けるために尽力している。あなたはまた、大きなボランティア組織に参加して、自然界の動物の苦しみを生態環境を損ねない方法で和らげようとしている。そのためには、政治的な努力と先進科学や情報処理サービスを組み合わせる必要がある。物事は常により良くなっているし、毎日は刺激に満ちている。

ポスト人類の具体像をもっと示そうとしても、我々の能力では限界がある。健康寿命が延びることはさておき、ポスト人類は、現在の我々の能力では想像もつかないような思考と経験が可能なことから、我々の想像力でポストヒューマンの人生を思い描くことに限界があったとしても不思議はないだろう。しかし少なくとも、これまで述べてきたシナリオのような、ポスト人類の最初の段階を察知することはできる。願わくば、この種の思考実験が、ポストヒューマンになることは素晴らしいという主張に十分な信頼性を与えるものであってほしいものだ。

私はこのエッセイの冒頭で、ポストヒューマンの一般的で中心的な能力について述べたが、これから述べる3つのセクションでさらに詳述して、ポストヒューマンであることは良いことだという主張は見かけほど過激ではないことを示したい。実際、人々と社会がすでに、ポストヒューマンの能力に対して極めて高い評価を暗に与えていることがわかるだろう。少なくとも、そうした方向の、広く容認された明確な傾向が見られる。したがって、私の主張には、いかなる強調的な意味でもバイアスはかかっていない。逆に、私の主張を否定することこそバイアスのかかった意見だと考える。なぜなら、私の主張を否定すれば、一般に許容されている倫理的信念や行動を無理やり否定することになるからである。テクノロジーによって人間を改良する可能性に向き合うとき、私は保守的な倫理と価値観の延長線上に立って対応したい。

3. 健康寿命

人がポストヒューマンになりたいと望む理由は、私には極めて明白に思える——健康に生き続ける能力を得られるのだから^{註6}。大多数の人間は、すでにこの願望を秘かに抱いているだろう。

人間は自分の健康寿命を延ばしたいと望む——つまり、健康で、活動的で、生産的であり続けたいと願う。だからこそ、車にエアバッグを取り付けるのであり、病気になれば医者にかかり、危険な仕事の給料は高く、行政や慈善団体は医学研究に多額の金を出すのだ^{註7}。命を犠牲にしてまで何かを目指す人々——自爆テロ犯、殉教者、麻薬常用者など——の事例が世の関心を集めるのは、彼らの行動が異常だからだ。危険な任務に命を懸ける救助隊員が英雄として称賛されるのは、世の人々がやりたがらないこと、すなわち自分の命を危険にさらしていることが認知されているからだ。

経済学者は過去30年間、労働者がお金をいくらもらえば発病や死亡のリスクを冒してもかまわないと考えるか、その金額を算出しようと試みてきた。結果は研究によってかなり異なるが、近年のメタアナリシスによれば、米国の働き盛りの労働者の統計的生命価値^{註8}の中央値は約700万ドルだという(Viscusi and Aldy 2003)。また、EUの環境総局(Environment Directorates-General)の研究は、90万-350万ユーロを適用することを推奨している(Johansson 2002)。医療経済学者の最近の研究によると、20世紀の米国住民の健康状況の改善が、生活水準の向上と消費の発展に大いに寄与しているという(Murphy and Topel 2003; Nordhaus 2003)。正確な数字に関しては疑問の余地があるものの、ほとんどの人々が健康を維持することに高い価値を置いていることは確かであろう。

健康寿命を延ばしたい願望は、必ずしもポストヒューマンになりたい願望ではない。健康寿命を延ばすことによってポストヒューマンになるためには、現在の人間が新しいテクノロジーに頼らずに達成できる限界をはるかに超えた健康寿命を実現しなければならない。少なくともすでに一部の人は、70歳まで健康と活力と生産性を維持しているので、それ以上に長く健康寿命を延ばしたいと願うならば、それはすなわち、ポストヒューマンになりたいと願うことと見なされるだろう^{註9}。

どれくらい長く生きたいかと尋ねられると、

85-90歳の間の数値を挙げる人が多いようだ (Cohen and Langer 2005)。これは通常、健康な人生は不健康な人生よりもずっと長いと想定されるからだ。この事実を念頭に置いて、健康寿命をどれくらい延ばしたいかを真剣に考える時期を決めるべきだ。長生きのためにはお金を払う用意があると人々は言うが、それは長生きするなら健康で質の高い人生を送りたいからだ (Johnson et al. 1998)。一般には85歳を過ぎると健康を損ねることが多いので、この85歳という数値が、人々が望む健康寿命をかなり低く抑えているのかもしれない。

「X歳まで生きたい」という発言自体が偽善的であるのかもしれない。実際のマーケットで示された、人々の志向——命に関わる危険な仕事の給料は高いとか、世間は死を回避するためのヘルスケアなどに進んで出費するとか——に基づく推定値のほうが、信頼性は高いかもしれない。健康寿命を延ばしたいとは思わないと言っている人々のうち、実際に寿命の延びる薬を手渡されたら態度を変える人が、果たしてどれくらいいるだろうか。もし現実的な選択肢を提示されたら、ほとんどの人が、老化と病と死という先行きの暗い道よりも、長命と健康と若い活力の道を選ぶだろう。

ある調査で、次のように尋ねたという。「あなたが考える年齢イメージに基づいて、何歳まで生きたいと思いますか?」100歳まで、または100歳以上長生きしたいと答えたのは、わずか27パーセントだった (Cohen and Langer 2005)。この質問とは別に、同じ調査で次のようにも尋ねた。「100歳以上生きられるとしても、食生活や運動に常に気を配り、喫煙とアルコールは禁止、ストレスは避けなければならないとしたら、長生きするだけの価値はあると思いますか?」この質問に対して、実に64パーセントがイエスと答えたのだ! 行動が制約されるのに、最初の問いの回答者よりも多くの人々が100歳以上生きたいと望んだのは、なぜだろうか。こうした質問は現実的な選択肢ではなく、根拠のない絵空事だと思ったからだろうか。おそらく、質問が絵空事として受け止められた場合は、回答者は文化的に許容されると思う態度で、あるいは世間に好印象を与えそうな態度で対応する傾向がある (たとえば、死を〈道運として〉受け入れるなど)。しかし、質問が現実的な裏付けのある現実的な選択肢であれば、そうした傾向は減少するだろう。この種の矛盾が示しているように、「X歳まで生きたい」

という人々の発言は、あまり真剣に受け止めるべきものではなく、むしろ人々の価値観を測るための指標としたほうが良いだろう。

ついでに言えば、自殺する人の割合はわずかであり、そのことから、生きたいという願望は、死にたいという願望よりも強いことがわかる^{註9}。さらに、〈完璧な健康を享受できる場合〉は、生きたいという願望は一層強くなる。このように、生きることを肯定的に考える傾向は強いので、一見して健康で、これからも健康に生きていけそうで、周囲の状況も破局的に悲惨というわけでもないのに、今すぐにでも死にたがっている人は、うつ病などの精神疾患が疑われるのだ。米国精神医学会は、自殺願望をうつ病の診断症状と規定している^{註10}。

たとえ健康でも長生きはしたくない、という答えが真剣なものだとしても、それがどれだけ十分な情報に基づいて熟考した結果の答えであるかについては、疑問の余地があるだろう。回答者として適切なのは、自分が置かれている状況がよくわかっていて、寿命を延ばすかどうかの選択に直接的な影響を受ける人たち、すなわち高齢者である。そして高齢者は普通、死よりも生を好むものである。高齢者は健康を害しているときも概して生を好み、そこそこ健康ならば圧倒的に生きることを選ぶ。精神的に健全な90歳の人間は、20歳や40歳のときよりも、もう1年余命が延びる意味の重さをよりよく理解できる立場にあると言えるだろう。肉体的にも精神的にも健全な90歳が (健康と活力が保証されるという前提で) 長生きすることを望むなら、この事実は「90歳で人生を終えるほうが良い」という主張に反論する根拠となるだろう^{註11}——もちろん、より高齢での死を肯定する主張に対しても。

以上のことは、麻痺症状を患う場合にも当てはまる。強壮な人々は、麻痺を患ったら生きる価値はないと思いがちだ。麻痺状態で生きながらえるくらいなら、死んだ方がましだと言う。しかしながら、実際に体が麻痺している人々の大部分は、自分の人生には生きる価値があると思っている^{註12}。麻痺を経験したことがない人よりも、麻痺を患っている人のほうが、麻痺を患う人生は生き続ける価値があるかどうかを、よりの確に判断できる。だから、話を元に戻すが、90歳の人のほうが、若い人 (若いころの本人も含めて) よりも、長生きすることの価値についての確に判断を下せるのだ^{註13}。

ある研究で、高齢者の中でも特に脆弱者を代

表している、80-98歳の入院患者414人を対象に、その生きる意志を調査した。その結果、40.8パーセントが寿命を縮めてまで健康になりたくないと答え、27.8パーセントが健康を取り戻せるなら、1年のうちせいぜい1カ月くらいは犠牲にすると答えた^{註14}。(1年後もまだ生存していた患者については、健康の改善のために命を犠牲にする傾向はさらに減少したが、相変わらず、何を優先するかは個人によってさまざまだった)。この研究からわかるように、患者が健康のために引き換えにしていると思う時間は、周囲の人間が思っているよりもはるかに少ない、ごくわずかな時間なのだ。

このように、老齢になっても、人生に対する満足感は比較的安定している。40カ国6万人の成人を対象とした調査では、対象者の年齢が20歳代から80歳代まで上がるにつれて、人生に対する満足度もわずかに上昇するとの結果が出た (Diener and Suh 1998)。肯定的で前向きな感情は幾分失われているものの、人生に対する満足感の上昇傾向を示したのだ。おそらく、肯定的で前向きな感情が改善されていたら、人生に対する満足感をもっと上昇しただろう (この可能性については後述する)。横断的なサンプル (70-103歳) を用いた研究では、健康機能に支障が生じた場合、それをうまくコントロールできなければ、年齢と結びついた肯定的な感情が逆転して、否定的な感情が生まれてしまうことがわかった (Kunzmann et al. 2000)。これらの結果が示唆するように、主観的な幸福 (たとえば人生に対する満足感) は加齢とともに低下するのではなく、実際には上昇することもある。そして主観的な幸福の減退 (たとえば否定的な感情) の原因は、老化そのものではなく、健康に制約が生じたことなのだ。

大抵の人々は、健康に生き続けたいという願望を態度で示す^{註15}。年齢に関係なく、誰もが健康な人生が続く価値を判断するためのベストポジションにいる。その判断は、健康に生き続けることには価値がある、というものだ。このことは、「完璧な健康状態ではなくても長生きする価値はある」という主張の、一応の根拠にはなる。事実、これは最高齢の人にも当てはまることであり、多くの人々にとって健康寿命を延ばしてポストヒューマンになるのは素晴らしいことだという考えは、決して極端にバイアスのかかった見解ではないことを示唆している。この見解は、すでに多くの人たちが暗に支持しているのではないだろうか。

4. 認識力

人間は認識力を向上させるのに熱心だ。誰もが、人の名前や顔をもっとよく覚えたいと思い、難解で抽象的な理念や、物事の関係性を素早く把握したいと思う。音楽をもっと深いレベルで理解したいという願望を、本気で否定する人などいないだろう。最高の認識機能を得る価値はあまりにも明白なので、わざわざ精査する必要などないかもしれない^{註16}。

認識力が重視されていることは、社会が教育に莫大なりソースを割り当てていることからわかる。その目的は、知識を伝えることだけでなく、一般的な推論能力、調査技術、批評的思考、問題解決能力を向上させることにも照準を合わせている^{註17}。多くの人々は、持って生まれたさまざまな才能（たとえば音楽や数学の才）や、具体的な能力（審美眼、叙述、ユーモア、エロチズム、精神性など）を伸ばすことを望んでいる。我々が頭をすっきりさせるためにコーヒーを飲んだり、寝不足で頭の回転が悪くなって後悔したりするのは、認識機能を向上させることを望むからだ。

もう一度繰り返すが、世間一般が認識力の向上を望んでいるからと言って、ポストヒューマンになることも望んでいるとは限らない。認識力を向上させてポストヒューマンになりたいということは、認識力を著しく向上させたいということだ。人々は今よりもほんの少し音楽やユーモアなどの才能を伸ばしたいだけで、多くは望んでいない、ということも論理的にはあり得る。この可能性について、2つの観点から考察したい。

まず第1に、伝聞や個人的な経験に基づいて言うと、平均以上の認識力に恵まれている人は、そうではない人と同等かそれ以上に熱心に、認識力をさらに向上させようとするものだ。たとえば、音楽の才能に恵まれている人は、音痴の人よりもその才能を向上させることに努力し、時間を費やす。これは、他の分野の才能についても言えるだろう。

こうした現象には、特定の分野で優れている人には多くの場合、報酬が与えられることも影響しているのかもしれない。才能に恵まれたミュージシャンは、そもそも音楽の才能に恵まれていない人に比べると、ほんの少し才能を磨くだけで、多くの金銭的報酬と尊敬を勝ち得るだろう。つまり、平均的な才能をそこそこ高いレベルに伸ばした人よりも、元から高い才能を極めて高いレベルまで伸ばした人のほうが、はる

かに高い報酬を得ることが多いのだ。しかしながら、こうした報酬の違いは部分的な説明にしかならない。認識力の高い人が才能を磨く理由は他にもあるだろうが、認識力の本質的な利点だけに焦点を絞っても、認識力の高い人は低い人以上に、自分の能力を伸ばそうとするものだ（少なくとも以下ということはない）。生涯、独房に閉じ込められることになったが、本、楽器、絵の具、キャンパスなど、才能を磨くために必要なものは手に入る人たちがいたとする。おそらく、すでに特定の分野の高い能力を身に付けている人は、その才能をさらに向上させるために、同じ分野の才能には恵まれていない人以上に努力するだろう（少なくとも以下ということはない）——身に備えた才能を磨くことによって得られる、本質的な利益のために^{註18}。大富豪にとっての100ドルは、貧乏人にとっての100ドルよりも有難味がないかもしれないが、これとは対照的に、向上した認識力の限界効用^{註19}は下がることはないだろう。

以上の考察が示唆するのは、少なくとも現代人の事例の範囲内の才能に関して、認識力を獲得することにおける（本質的な）（つまり、手段として使うとか、地位のために利用するという意味ではない）効用からは、継続的に利益を得ることができる、ということだ^{註19}。だから、今日の人間の才能の限界内で能力を磨けば報われるが、その限界を超えて才能を磨いても無駄である、とは信憑性のない想定だろう。また、今日の人間に可能な最高レベルかそれ以上まで——おそらくポストヒューマンのレベルまで——認識力を強化することは、能力を高めた個人にとって望ましい、と結論付けるだけの明白な理由がある。こうした結論に達するのは、能力の高い人は、その能力を備える価値や、その能力を高める価値を、能力の低い人よりも、よりよく理解できると考えるからである。

5. 感情能力

「健康寿命の強化」を定義することは、簡単である。健康的、活動的、生産的であることの意味はよくわかっているし、病気で、能力を欠いて、死んでいる状態との違いもよくわかっている。健康寿命の強化とは、簡単に言って、前者の状態が継続する期間を延ばすための介入である。一方、「認識力の強化」を正確に定義

することは、もっと難しい。なぜなら、認識力はいくらも多面的に計測されるものであり、さまざまな認識力が相互に複雑に作用し合っているからだ。また、さまざまな環境で役に立てるために、特定の認識力をどのように組み合わせればよいかを決定することは、総じて極めて難しい問題だ。たとえば、事実や体験を忘れる程度は、どのくらいが望ましいかは明白ではない。その答えは、さまざまな複合的な要因によるだろう。しかし、それでも、認識機能の向上や低下をさまざまな面から判定するための、大まかな指針はある。たとえば、思考が十分に明晰であるか、難しい言葉——たとえば「音楽能力の強化」や「抽象的推論力の強化」——を簡略にわかりやすく説明できるか、などである。

そして、「感情能力の強化」を定義することはさらに難しい。比較的簡単な例も、いくつかはある。たとえば、単純な神経系のアンバランスが原因で、たびたび自殺を図っているうつ病患者に、再び人生に興味を抱いて人生を楽しめるようになってもらうためには、その感情面の能力を改善する手助けをすればよい、という意見に大半の人は同意するだろう。しかし、明らかに精神病理学的な治療のための介入を伴うケースは別にして、何を強化と定義できるのかは、それほど明らかではない。気質や個性の多様性について、本人は普段どう考えているかという、繊細だが本質的なことをはっきりさせなければ、こうした問題に評価を下すことはできない。

同様に、ポストヒューマン・レベルの感情能力の定義も難しい。とはいえ、多くの場合、人間は感情に関わる能力と機能を向上させようと努めるものだ。我々は嫌悪、軽蔑、攻撃などの感情を、それが差別的あるいは非建設的であると自覚するときは、これらの感情を抑えようとする。瞑想したり体を動かしたりして、もっと平静になろうとするだろう。信頼と愛情を示すに値すると思う人々に対して、もっと繊細に親身に対応できるように、自己を鍛錬するかもしれない。不合理に思える恐怖は克服しようと努め、向上心の妨げとなる欲望とは戦おうとする。多くの人が生涯にわたって、心を育み、気高い心根を磨き、個性を高め、より良い人間になろうと努めている。こうした努力を通じて、我々は感情能力を改善・向上させるという目標を目指す。

感情能力とは、こうした目標を組み込んだ、あるいは反映した概念だと考えるのは妥当なことだが、多様で〈高度な感情能力〉が存在す

るのだから、多様な(個性)も存在するだろう。あるいは、さまざま感じ方や反応の仕方が組み合わさって、独自の優秀さを発揮することもあるだろう。そう考えるなら、感情面での個性をさらに素晴らしいものとするような、多方面にわたる「感情能力の強化」とはどういうものかわかるだろう。ポストヒューマンの感情能力は、現在の人間がテクノロジーの助けを借りて達成するレベルよりも、はるかに優れたものとなるはずだ。

しかし、現在達成できる感情能力よりも、さらに優れた感情能力があるかどうか、疑問に思う人もいるかもしれない。最大限可能な優れた感情能力が存在するとして、現時点で最も優れた感情能力の持ち主ならば、その理想の感情能力に近づくことができ、したがって、ポストヒューマンの感情能力の領域には改善の余地はあまり残っていない、ということもあり得るかもしれない。でも、私としては、そんなことはないだろうと思う。我々はすでに、さまざまな感情にまつわる感受性を微調整してバランスを取る、潜在的な能力を獲得しているが、それはさておき、まったく新しい心理的様相と感情が存在する可能性がある、私は考える。それは、我々人間が発達させてこなかった種類の体感神経の機能であり、その感受性は、もし獲得できれば必ず素晴らしいものとなるだろう。

このような新しい感情や精神状態を直感的に理解することは難しいが、それは当然のことだろう。想定によれば、我々には現在、ポストヒューマンに必要な神経機能の基盤が欠けているのだから。人間の正常な体験の範囲内で類似のケースを例に挙げれば、理解できるかもしれない。たとえば、ロマンチックな恋の体験は、多くの人が高く評価する。しかし当然ながら、子どもや思春期前のティーンエイジャーには、ロマンチックな恋の意味がわからないし、大人がこの体験をめぐって大騒ぎする理由もわからない。おそらく、我々は現在、ポストヒューマンの感情と情熱と精神状態に関しては、子どもの立場にあるのだろう。我々がポストヒューマンの感情能力を獲得するまでは、我々に欠けているものは何でなるかは、わからないのかもしれない。

強化されるであろうと想像される、感情能力の側面は、主観的な幸福感とその特色——喜び、快適、官能的な快楽、楽しみ、積極的な興味、興奮など——だ。快楽主義者は、快楽そのものが本質的に素晴らしいと主張するが、素晴らしいものの重要な構成要素として快楽

を認めるのに、快楽主義者である必要はない。暗く、冷たく、恐ろしく、苦痛に満ちた世界と、楽しみと刺激的なチャンスと愉快的な気まぐれと魅力的なセンセーションに満ちた世界の違いは、体験者の享楽に関する感度が異なっていることが原因だ。多くは、この感度という唯一のパラメータに依存している。

我々が評価するだろう他の能力を犠牲にすることなく、主観的な幸福感をどれだけ強化できるかは、興味深い疑問である。おそらく現在の人間にとって、度を越した愛着や精神的アンバランス——この状態が長引くと、社会に対してきちんと向き合うことができなくなる——に墮すことなく経験できる主観的幸福感には上限があるだろう。現在の人間が周囲の状況に適切に反応する能力を損なうことなく味わうことのできる至福を超えた至福を体験することは、現在の人間とは異なる構造を持つ者になら可能かもしれない。そのような者にとって快楽の程度を測る目盛りは、我々にとっての快楽と苦痛の間の振れ幅に相当することもあり得るだろう²⁰。〈ポストヒューマン的に幸福な〉存在の可能性とその心理的特性を考える場合、人間精神の付随的な機能を基にして推察しなければならない。我々人間を焼き尽くすような体験も、ポストヒューマンの知性にとっては単なる〈スパイス〉にすぎないかもしれない。

ポストヒューマン・レベルの快楽が可能かどうか、さらに一般的に言えば、ポストヒューマンの感情能力が可能かどうかについて、この場で態度を明らかにする必要はない。しかし、ほぼすべての人間の感情能力には、改善の余地が大いにあることは確信できる。なぜなら、現在の人間の具体例の範囲内でも、感情能力と主観的な幸福感にはさまざまなレベルがあり、ほとんどの人にとって夢を上回る地点に実際に到達することは不可能だからだ。多くの人々がその感情能力を改善したがっているという事実から推して、ポストヒューマン・レベルの感情能力が可能になれば、それは人々の目にさぞ魅力的に映るだろう²¹。

6. 議論の大枠と、根拠となる理由

ここでいったん立ち止まって、これまでの議論の大枠について熟考することは有益かもしれない。私は人間の核となる基本的な3つの能

力(健康寿命、認識力、感情能力)を列挙することから始め、ポストヒューマンとは、これらの能力の少なくともひとつを、現在の人間がテクノロジーの助けを借りずに達成することは不可能なレベルで有しているものであると、定義した。

ポストヒューマンのレベルでこれらの能力を持つことは、たいへん望ましいと主張する意見を、私は信頼に足ると考えた。そのために私は、この能力を持つ意味を明らかにして、反論の前提を誤解している反論には妥当性がないことを説明した。さらに、多くの人が3つの能力(健康寿命、認識力、感情能力)を最高レベルまで高めたいと願い、そのために多くの労力と費用をかけていることを示した。この願望は、社会が何にどれだけ支出しているかの割合に反映されている。たとえば、健康寿命を延ばすための医療や、認識力を向上させたための教育には、莫大な財源が充てられている。そして、これも重要なことだが、少なくとも健康寿命を延ばすことと認識力を向上させることに関しては、現代人の能力分布図の最上位に位置して、能力を漸進的に向上させることの価値と望ましさを最もよく判断できる立場にある人々には、能力を追加的に向上させることは望ましいと肯定する傾向がある。多くの認識機能について言えば、能力向上の限界効用は、能力のレベルに応じて増大する。つまり、現在の人間の能力の範囲を超えた向上は、現在の人間よりもよりよく判断できる立場にある存在が評価すれば、望ましいと見なされるだろう。

もっとも、人々がXを求めるからといって、Xが望ましいとは限らない。また、人々がXは望ましいと判断し、Xの望ましさを判定するのに最も適した立場にある人々がその判断を支持したとしても、その事実がXの望ましさや有益さを証明したことにはならない。たとえ、傾向を論じる類の価値論も、Xには価値があるとの結論を導き出す前提とはなり得ない。傾向を論じる価値論は、以下のような主張を行うかもしれない(たとえばLewis 1989などを参照)。

Aという人物が完璧に合理的であり、完璧な知識を備え、Xのことを完璧に熟知している上で、AがXを評価する場合に限り、XはAにとって価値がある。

人間の核となる基本能力を強化することは望ましいと、最もよく理解している人々であっても、

完璧に合理的ではなく、完璧な知識を備えておらず、能力強化に精通しているわけでもない。もしこれらの人々がもっと合理的で、知識が豊富で、能力強化に精通していれば、おそらく彼らは能力強化など評価しなくなるだろう。もし、誰もがポストヒューマンになることを望ましいと評価したとしても、理論的には、ポストヒューマンになることは望ましくない可能性もある——たとえ、評価傾向という観点から価値を定義する価値論を前提としても。

これまでに提起してきた議論は、演繹的なものではない。その目指すところは極めて控えめなものであり、以下の見解の妥当性を想起してもらうことである。(1) 議論の対象となった、3つの次元(健康寿命、認識力、感情能力)に沿った能力強化は原則的に可能であり、潜在的にも本質的にも重要な価値がある。(2) ポストヒューマンを生み出すのに十分な能力強化は、本質的に極めて重要である。ただし、これら議論を無効にすることができる。議論を無効にする方法のひとつは、さらなる情報、合理的な論拠、さまざまな知識——これらはみな、現代人には説明のつかないものであり、取り込むことができれば、現代人の見解を変化させるだろう——を指摘することである。たとえば、極めて高齢の人が、完璧な健康状態でもう1年生きることが自分にとって良いと判断するときに犯すであろう、論拠の誤りを、評論家たちが指摘することも可能だ。しかし、私は熟考の結果、私の結論には一応の証拠があると考え。

私が主張する立場——それは、上記の議論の裏付けとなる——に別のやり方で到達することもできる。たとえば、健康で長生きすること、社会や他人への理解を深めること、適切な情動を感じながら人生を楽しむことが可能になれば、それは価値ある目標となり得るかどうかを、我々は自分自身の心に問いかけて決めることができるだろう(Bostrom 2005参照)。あるいは、ポストヒューマン・レベルの健康寿命と認識力と感情能力を持つことで、自分の価値観にあった人生を実現できるかどうかを検証することができるだろう(これらのテストは先の(1)と(2)を肯定的に判定していると、私は思う)。

また、我々の無知を思い、未踏の領域の広大さを思えば、先の結論は妥当なものと言えるだろう。現在の人間の能力で具体的に示すことのできる存在様態の〈領域〉を、 S_H としよう。また、ポストヒューマンの能力で具体的に示すこと

のできる存在様態の〈領域〉を、 S_P としよう。直観的に言って、 S_P は S_H よりもはるかに大きい。人間の寿命よりもポストヒューマンの寿命のほうが、はるかに長い期間を生き抜くことができるだろう。人間の認識力よりもポストヒューマンの認識力のほうが、より多くのことを考えることができるはずだ(たとえば、ポストヒューマンはより高度な楽曲を創作して、それを鑑賞することができるだろう)。ポストヒューマンの感情機能をもってすれば、人間よりも多くの精神状態と感情を経験できるのではないかと。よほど想像力を欠如していない限り、最も価値のある存在様態は、すでに S_H に含まれていると思う人はいないであろう。

ここでひとつ、たとえ話をしてみよう:誰も覚えていないくらい昔から、深く狭い谷に住んでいる部族がいました。部族の人々は、村の外に何があるかなんて、滅多に考えませんでしたし、たまたま考えることがあっても、摩訶不思議な場所だろうとしか思いませんでした。ある日、1人で山間に暮らしている賢者が、村に降りてきました。賢者が言うには、山頂まで登ってみました。ところ、はるかかなたの水平線まで土地が広がっているのが見えたそうです。賢者は、平野、湖、森林、曲がりくねった川、そして山と海を見ました。賢者は言いました——わざわざ調べなくても、この広大な土地に莫大な価値のある資源が眠っていると考えることは、理にかなっているのではないだろうか……このたとえ話と同様に、 S_P の圧倒的な大きさと多様性は、それ自体が S_P には大きな価値があるだろうと考えることを肯定する、明白な理由となるのである。

7. 人格の同一性

これまでの説明で、ポストヒューマンになることの素晴らしさを証明できたとして、次の疑問に取り組みたいと思う。それは、「ポストヒューマンになることは、我々にとって良いことなのだろうか」という疑問だ。作曲家ヨーゼフ・ハイドンを例に挙げて考えてみよう。ハイドンになることは、良いことかもしれない。ハイドンが普通の人よりも良い人生を送ったと仮定すると、ある意味、ハイドンになってハイドンの人生を生きたほうが、普通の人になって普通の人的人生を生きるよりも良いということになる。さらに言えば、これは普通の人々の価値判断の視点に立っての考えである。より良い存在様態と人生

のために役立つと思える、あらゆる客観的基準に基づいて、ハイドンの存在様態と人生は、普通の人々の存在様態と人生よりも良いと、普通の人々は思うかもしれない。だからと言って、普通の人々がハイドン(もしくは、ハイドンに匹敵するような後世の人物)になることや、ハイドンの(もしくはハイドンのような)人生を送ることは素晴らしい、ということにはならない。その理由はいくつかあるだろうし、それを検証する必要もある。

そもそも、普通の人々は普通の人であることをやめなければ、ハイドンにはなれないだろう。普通の人々の精神と肉体が、次第にハイドンの(あるいはハイドンに匹敵する人物の)精神と肉体に変わっていくような思考実験が可能だとすると、そのような変容を経験した後も、人格の同一性が元のままに保たれるかどうかは、まったく不明である。普通の人々の人格の同一性が基本的に、記憶や気質といった核となる心理的機能で成り立っているとすれば、ハイドンには普通の人々の心理的機能がないので、普通の人々はハイドンに匹敵する人物にはなれないということになる。普通の人々が生きるに値する人生を送っているとすれば、普通の人であることをやめさせるような変容は、ハイドンになることも含めて、普通の人にとっては良くないことだろう。

現在の人間は自分の人格を保ちながらポストヒューマンになれるのだろうか。それとも普通の人々がハイドンになる場合と同様、普通の人々の人格はその過程で必然的に消滅するのだろうか。しかし、ポストヒューマンになる場合は、重要な点で、ハイドンの場合とは異なっている。普通の人々がハイドンになるためには、普通の人々の人格を普通の人たらしめている心理的機能のすべてを喪失しなければならない。普通の人々は記憶、目標、独自の技術のすべてを失い、その全人格は抹消されて、ハイドンの人格と置き換えられるだろう。これとは対照的に、人間がポストヒューマンになっても、人間の記憶、目標、独自の技術など、人間の人格にとって重要な多くのものが、そのまま保たれるだろう。このように、ポストヒューマンに変容しながらも、人格の同一性を保持することは可能はずだ²²。

健康寿命を大幅に延長することでポストヒューマンの状態を達成した場合は、少なくとも短期間は、人格の同一性が維持されることは明らかだ。たとえば、今夜、科学者が私の就寝中に、私の細胞に老化現象を永久に阻止する分子治療を施すことを、私が知っていたとする。

私は、手術が失敗して死んでしまうのではないかと、恐れるかもしれない。しかし、手術が成功したら死んでしまう、とは思わない。健康寿命の延長は、私の人格の同一性の保持に役立つだろう。(もっとも、余命が千年まで伸びたことに精神的ショックを受けて、精神状態がすっかり変わってしまったら、新しい私は、以前の私とは異なってしまう、ということはある得るだろう。しかし、これは必然的な結果ではない)^{註23}

ウォルター・グラノンは、「200年を超える寿命は望ましくない。なぜなら、それほど長い期間人格の同一性を維持することはできないからだ」と主張した(Glannon 2002)。グラノンの主張では、人格の同一性(グラノンは人間の分別を決定づける重要な要素と解釈している)は心理的関連性に依存するとしている。この見解によれば、我々が人間という生命体の未来の時間領域に関心を抱くのは、過去の記憶と未来の計画や目的のリンクを通じて、未来の時間領域が現在の時間領域と結びついている場合に限る、ということになる。もし、未来の時間領域が現在の状況を記憶していないとしたら、あるいは未来に向けての計画や目的がなかったとしたら、未来の時間領域は現在の自分の一部ではない。我々の人格をまとめ上げている心理的関連性は200年以上は続かないと、グラノンは主張しているのだ。

人格の同一性に関するグラノンの形而上学は認めるにしても、その主張にはいくつかの問題点がある。まず、200年を超える目的や計画を持つことは不可能であるとする理由がない。今現在の人間の能力でも可能なことだ。実現までに数百年を要するが、知的に刺激的で現実的なプロジェクトは、簡単に思いつくことができる。数百年の齢を重ねても健康な未来の自分が、今現在の出来事を覚えていられないと考えることには疑問がある。高齢者は若いころのことをよく覚えているものだし、その記憶が年とともに衰えていくとは限らない。記憶容量の向上が可能になると仮定すれば、遠い未来に若い日のことを思い出せないのではないかと懸念は、完全に消滅する^{註24}。さらに、もしグラノンが正しければ、幼い子どもにとって大人になることは〈望ましくない〉ことになる。なぜなら、大人は幼かったころのことを覚えていないし、幼い子どもは将来数十年間にわたる計画や目的など持っていないからだ。この例が示唆するように、グラノンの説は我々の直観に反している。過

去と未来の心理的関係が最終的には希薄になるとしても、死んでしまうよりも長生きして成長し続けるほうが望ましいと考えるのが妥当である。同様に、数世紀を超えて生きた結果として同じ人間ではいられないとしても、ポストヒューマンの健康寿命を獲得することは望ましいだろう。

人格の同一性が保持されるとしても、認識力や感情能力が著しく向上するとは限らない。では、人格の同一性を失わなくても、劇的に賢くなり、音楽の才能を延ばし、感情能力を高めることはできるだろうか。その答えを左右するのは、以下の疑問——認識力と感情能力のどちらの変化を予想するか、どうすればその変化を実現できるか、向上した能力をどう使うか——である。人格の同一性と物語の同一性^{註25}がともに保持されると強く確信できるのは、以下のことを断言できる場合である。(a) 既存の能力を犠牲にすることなく、新しい能力を追加したり、既存の能力を強化したりすることで、変化が実現される (b) 変化は長期にわたって段階的に実現される (c) 変化のプロセスの各段階は、本人の完全な自由意思によって選択される (d) 新しい能力は、既存の能力が周期的に行使されることを妨げない (e) 本人は古い記憶と、さまざまな基本的要求と気質を保持する (f) 本人は旧来の人間関係、社会的関係を保持する (g) 変化は、本人の自己像や経験談に合致している。ポストヒューマンの認識力と感情能力は、原則として、これらの要件が満たされるかたちで獲得される。

いずれかの変化の過程で、(a)–(g)のすべての要件が満たされていなくても、(個人的な思い入れのある数字や経験談についての)同一性に関連した一般的な要素を十分に保持することはできる。そして、安心して変化を体験する気持ちを損なうような、アイデンティティに関わる反感を引き起こすことは避けられるだろう。自己変革の技術的な側面に対して、他の人間的な変革——移住、転職、改宗など——よりも厳格な基準を適応すべきではない。

ここでもう一度、大きな人間的变化をもたらす、ごくありふれたケースについて考えてみよう——それは〈成熟〉だ。子どもに比べると、大人ははるかに優れた認識力を備えている。しかしその一方で、新しい言語を訛りなく話せる能力は失っている。大人の感情能力は、幼少期に比べてはるかに発達している。アイデンティティという概念の具体例を挙げると、個人的な数字に

関する同一性、経験談に関する同一性、一般的な意味での性格に関する同一性、それより深い意味での核的な特徴に関する同一性は、いずれも重要なものだが、そうした同一性がこの〈成熟〉という変化を経ても保持されるかどうかを問わなければならない。

その答えは、我々が同一性という概念をどう理解するかにかかっている。同一性の基準の許容範囲を広く設定すれば、同一性は完全に、もしくは概ね、成熟を経ても保持される。しかし、そういう意味での同一性は、他のさまざまな変化でも——子どもが大人に成長する以上の深い意味を持つ変化でも、さらには、ポストヒューマンに変化する場合も——保持されるだろう。それでは、同一性の保持に関して、もっと厳しい基準を課したらどうなるだろうか。その場合、いずれかの同一性をまったく混乱させることなくポストヒューマンになることは不可能だろう。しかし、このような限定的なとらえ方では、子どもが大人に成長する場合でも、同一性は混乱することになる。子どもにとって成長が悪いことであるはずがない。こういう厳密な意味での同一性の混乱は、正常な人生経験の一部であり、本人にとっては不幸でも災厄でもない。

それでは、成長を続けて、ある日、ポストヒューマンの能力を持つまでに成熟することが悪いなんて理由があるだろうか。あるわけがない。もしこれが、人間が成長していく常道ならば、ポストヒューマンになり損なうことは不幸だと、我々は当然のように思うだろう——子どもが正常な能力を持った大人に成長できなかった場合のように。

宗教を信仰している人々ならば、現在の人間としての肉体が終了した後起こるだろう、ポストヒューマン的な存在への劇的な変身を期待することに、すでに慣れているだろう。このような考えを持つ人たちのほとんどは、変身する人にとって、その変身は良いことだと考える。

8. 責務

人格の同一性の問題は別にして、普通の人にとってハイドンになることは望ましくない、第2の理由を説明したい。普通の人とはさまざまなプロジェクトや交流に関わり、ハイドンだったら実行できないような責務を果たしているかもしれない。普通の人にとって重大な責務なら、それ

を果たせないのは普通の人にとっては悪いことだ。たとえば、普通の人である夫が、普通の人である妻をととても大切にしていたとしよう。夫婦の絆は強く、夫は妻の強い願いに反するようなことはしたくない。そして、夫がポストヒューマンにならないことが、妻の強い願いだとする。ポストヒューマンになることが夫にとって良いこと——理解力が高まり、健康で長生きできる——としても、夫が最も重大な責務だと思ふことを果たせなければ、総合的に見て、それは夫にとって悪いことなのだ^{註25}。

ポストヒューマンになることは人間にとって悪いことだという考え方は、ポストヒューマンには実行できない責務を抱えている人間が、その責務を果たせないのは悪いことである、という仮定に基づいている^{註26}。この仮定を認めるとしても、ポストヒューマンになることは人間にとって必然的に悪である、という結論には至らない。大抵の場合、ポストヒューマンに実行不可能な責務などないだろう。確かに、先に挙げた夫の場合は、最も重大な責務に違反せずにポストヒューマンになることはできないが(もちろん、妻が気を変える可能性がないわけではない)、これは特殊なケースである。

この夫に匹敵するほど重大な責務を抱えていない人たちもいる。そうした人たちには、ポストヒューマンと責務の問題は当てはまらない。しかし、重大な責務を抱えている人にとっても、ポストヒューマンになるのは良いことである可能性もある。ポストヒューマンになっても、責務を果たせると思われるからだ。プロジェクトや課題に対する責務について考えてみれば、はっきりとわかるだろう。大抵のプロジェクトや課題は完遂することができるにしても、ポストヒューマンの能力を獲得することができれば、よりよくより確実に完遂できるだろう。さらに対人的な責務について言えば、健康寿命がもっと長くて認識力や感情能力がもっと高ければ完遂できたのに、そうではなかったために完遂できなかった、という場合が往々にしてあるものだ。

9. 生き方

人格の同一性や、対人・対プロジェクトの責務の問題に加えて、ポストヒューマンになることが良いことかどうかを疑う、第3の理由がある。この第3の理由は、もっと広い意味での対人関

係と関連がある。そして、ある人にとって良いことが、その人を取り巻く環境や状況とどう関わっているか、という問題とも関連がある。〈良い人生〉という概念は、〈生き方〉にふさわしく繁栄するという概念と関連があると考えていいだろう。〈生き方〉とは、信条、関係、社会的な役割、義務、習性、プロジェクト、心理的特性を生み出す母体であり、この〈生き方〉について考えずに、人生の〈善し悪し〉や存在様態について考えても意味がない。

その論拠は、以下のようなものだ。クローバーにとって、ツツジに育つことは良くない。ハエにとって、カラスのように考えて行動することは良くない。同様に、人間にとって、ポストヒューマンの能力を獲得して、ポストヒューマンの人生を始めることは良くないことではないか。クローバーにとっての幸せの基準は、クローバーとしての特徴を実現することに成功し、クローバーという種が受け継いできた自然な〈究極の目的〉を成就することにある。同様のことは、ハエにも当てはまる。さて、人間について言えば、人間の個性の多様性の許容範囲が、他の種族よりも広くなればなるほど、事態はもっと複雑化する。人間は個人によって異なる〈生き方〉を追求するので、ある人にとっての素晴らしい人生は、別の人にとっての素晴らしい人生ではない、ということにもなる。我々は現在、人間としての生き方を追求しており、我々にとって良いことは、我々の生き方を参照して定義されているので、「ポストヒューマンになるのは良いことだ」という考え方が当てはまらない人もいよう。ポストヒューマンにとって、ポストヒューマンになるのは良いことだが、人間にとっても良いことではないということもあり得る。

この第3の理由は、すでに論じた第1の「ポストヒューマンは素晴らしい理由」と第2の「ポストヒューマンになることは素晴らしい理由」の集合体のようなものである。すなわち、「なぜ、人間にとってポストヒューマンになることは素晴らしいのか」。その理由のひとつは、人間からポストヒューマンに変化する際に、人格の同一性が保持されない可能性があるからだ。クローバーの比喻は、この問題を考えるヒントとなるかもしれない。クローバーがツツジに変わる場合、クローバーはおそらくその過程で存在することをやめるだろう。ハエがカラスのように考えて行動するようになったら、それはまだハエなのだろうか。以上のことから推して、

問題とすべきは、変化の過程でアイデンティティが妥当なかたちで保持されない可能性がある、という主張であろう。しかし、ポストヒューマンになっている人間に關係する限りにおいては、我々はすでにこの問題に関して言及している。

問題となっているのは、アイデンティティよりも、むしろ第3の理由だろう。クローバーがツツジになる際に生じる問題は、その過程でクローバーが存在することをやめることだけでなく、ツツジであることはクローバーであることよりも良いと考えるのは誤りだろう、ということだ。クローバーとツツジを所有する人間にとっては、どちらがきれいか経済的メリットがあるかといった外的な評価基準は存在するが、本質から外れた考察はしないことに言う、クローバーとツツジは同等である。繁茂するクローバーは、繁茂するツツジと同等に繁茂している。植物にとって繁茂することが良いことであるなら、どちらかの種のほうが本質的に優れているとか、良く生きる可能性が高いということはない。ポストヒューマンを肯定する意見に反論する人は、人間とポストヒューマンに関して、これと同じことを主張するかもしれない。

私は、こうしたたとえ話は誤解を招くと思う。人間は植物でないし、人間にとっての価値ある存在様態の概念は、植物にとって繁茂する状態が価値ある存在様態であることとは、本質的に異なっている。比喩的な意味で、植物その他の感情や知覚力を持たない存在の利益を考えることは可能だ。たとえば、クローバーは水を〈飲み〉、時計はネジを巻いて〈もらい〉、きしむ車輪はちょっと油を差してもらおうと〈良くなる〉。機能主義的な根拠に基づいて利益を定義することが、こうした問題を理解するための唯一の方法かもしれない。時計の機能は時間を表示することであり、ネジを巻かれなければ、時計はこの機能を実行することに失敗する。だから、時計はネジを巻いて〈もらい〉必要がある。しかし、知覚力を持つ存在は、その機能に基づいた比喩的な意味だけでなく、厳密な意味で、その存在にとって基本的に良いことに基づいた利益を有している。そして人間にとっての利益は、利害關係の対象の観点や、利害關係が生じる状況の観点から定義される^{註27}。クローバーにとってツツジになるのは良いことだ、という主張に意味がないのだから、同様に、人間にとってポストヒューマンになるのは良いことだという主張にも意味はない、ということにはならない。

ポストヒューマンになることで、人間がその機能をもっと上手に行使できるようにならなくても、ポストヒューマンになることが人間にとって利益であることを証明する根拠は他にも存在するだろう。

人間のような複雑で自律的な存在が、明確に定義できる〈機能〉を持つ、と考えること自体が非常に問題である。特定の個人の機能、特定の生き方の機能、という考え方をしても問題は残る。農家の人の機能は耕作をすること、歌手の機能は歌うこと、と機能を定義したとする。しかし農家の人は、その他の機能の持ち主でもある。たとえば、歌手、母親、姉妹、住宅所有者、運転者、テレビの視聴者など、際限がない。かつては美容師だったかもしれないし、将来は小売店経営者、ゴルファー、身体障害者、性転換者、あるいはポストヒューマンになるかもしれない。今現在、いくつかの役割を担っていて、いくつかの機能を満たしているという事実から、常識的で明確な結論を引き出すことは難しい。せいぜい、農家として働く限りは、作物や家畜の世話をすべきである、と結論付けることくらいだ。しかし、農家を営んでいるという事実から、今も将来も農業に従事すべきだという結論には至らない。同様に、今現在は人間であるという事実から導き出せる結論は、人間にとって良いこと——歯を磨いて、睡眠をとって、食事をとることなど——をすべきである、ということだけだ——ただし、人間であり続ける限りにおいて。もし、睡眠を必要としないポストヒューマンになったとしたら、もはや睡眠をとる理由はない。そして、今現在は睡眠が必要であるという事実、睡眠を必要としないポストヒューマンになってはいけなさと断る理由にはならない。

ポストヒューマンに反対する人は、この時点で、新しい論点を立てることもできるだろう。人間には、本人の社会的な役割や個性や機能には左右されない、重要な利益がいくつかあるはずだ。これらの利益は、睡眠がもたらす利益とは異なる。睡眠がもたらす利益は、睡眠を必要としない体に変化するための根拠とはならない。むしろ、睡眠のような絶対的で無条件に利益となることは、その利益を得られなくなる変化を否定する根拠となるだろう。

私はすでに、個人の利益とはそういうものであること、ポストヒューマンになることが利益にならない人もいることを認めている。そして、上記で第2の理由について論じてきた。私の立

場では、これは問題とはならない。他の人たち（おそらくは大多数、あるいはほぼすべての人間）にとって、ポストヒューマンになるのは良いことである、という真実と両立し得るからである。それでも反論者は、すべての人は人間としての絶対的な利益を有していると主張するかもしれない。それらの利益はどうやら、人間の自然な特性や自然な終末に由来し、さらには人間はその固有の特質に基づいて繁栄すべきであるとの理想に由来するようである。このような普遍的に共有される絶対的な人間的利益が存在するとしたら、人間にとってポストヒューマンになるのは良いことである、とのテーゼは無効になるのではないだろうか。

10. 人間性

人間の〈究極の目的〉とは何であるかについて、2つの理論を検討してみよう。

自然主義的な見解の範囲内で、個人にとってのテロスを求める場合、その重要な候補となるのが、個人の包括適応度^{註4}の最大化だ。進化の観点から、個人の能力を特徴づける最も自然な方法は、おそらく(昔ながらの生活環境に合わせて)包括適応度を最大限に活用することである。そのように考えると、我々の足、肺、ユーモアセンス、親としての本能、性衝動、ロマンスを好む傾向は、包括適応度を増進する究極の機能として役立っている。個人のテロスを、その人の遺伝子を効果的に拡散することだと定義すると、一見して極めて魅力的なポストヒューマンの将来性は——ヒトゲノムの徹底的な改変を伴う可能性がある場合はなおのこと——テロスの成功裏な実現とは矛盾するように思える(我々の遺伝子を他の遺伝子に置き換えることは、我々の遺伝子を拡散するための効果的な方法ではないだろう)。

しかしながら、包括適応度を最大にすることがテロスであるという考えは、妥当性を著しく欠いている。このような見解を提唱する、倫理的な哲学者はいない。確かに、人間にとって良いことは、人間の包括適応度を最大にするものから発生することが可能であり、発生するのが通常である^{註28}。とはいえ、人間にとっての善の理論を、人間の行動パターンに内在するテロスから導き出そうとする人々は、進化の概念よりも行動パターンの概念を検証することから始める必要があるだろう。

魅力的な出発点となるのが、「人間は本質的に理知的な動物であり、人間のテロスはその理知的な機能を発達させて行使することだ」とする公理である。この種の見解は、少なくともアリステレスまで遡ることができる。この見解のメリットが何であれ、私がこのエッセイで展開している主張に対する有効な反論ではない。なぜなら、ポストヒューマンも人間同様、合理性のテロスを実現することができるからだ。実際、我々にとって良いことは、我々の理性を発達させて行使することであるのならば、適切に強化された認識力を持つポストヒューマンになることは、我々にとって良いことだ(できれば、健康寿命も延長されたほうが望ましい。理知的機能を発展させて享受するだけの時間的余裕を持てるからだ)。

人間は生まれながらにして、あらゆる限界を克服することを試みて、状況を改善するために模索し、発明し、実験し、道具を使おうとする、とはよく聞く話だ^{註29}。この話が真実であるかどうかはわからないが、正反対の傾向も少なくとも強いようだ。多くの優れた発明は、その導入時に多くの人々の抵抗に遭ったし、発明家はしばしば酷く迫害された。挑発的な言い方をすれば、人類は反技術的な性格だったにもかかわらず、技術的進歩を遂げたのである。歴史的に見て、人類が技術的進歩を遂げられたのは、技術的な発明が本質的に有益だったことと、人々が発明を競い合って利用したからである。大多数の人々は、限界を押し広げることに賛同して発明を歓迎するような性格だったわけではない^{註30}。それはともかく、より前に、より遠く、より高く進むことが“人間の本質”であるのならば、ポストヒューマンになることの望ましさに関して、この“人間の本質”からどのようにして何らかの結論を引き出すのか、私には見当もつかない。人間の本質はあまりにも尊敬できないので(称賛すべき点多いけれども)、「Xは人間の本質である」という単なる事実を、「Xは良い」とする根拠(もしくは自明の理)になどできない。

11. 反論と回答のまとめ

反論：唯一のポストヒューマン的存在になることは、その人物にとって悪いことだ。なぜなら、孤独なポストヒューマンには対等な人間関係を築けないからだ。

回答：ポストヒューマンがたった1人である必然性はない。

人間の能力には基本的で本質的な価値はないかもしれないし、さらには、能力を持つことがその人を幸福にするかどうかは状況次第である。それでも、我々が普段、お金や健康の価値を話題にするのと同じような感覚で、能力の価値について語るには意味があるだろう。これを価値の帰属という。つまり、物や特性は〈通常〉、それが何であれ基本的な価値を持つものに対して積極的に寄与する、という意味だ。ポストヒューマンの特性を評価するときに生じる疑問は、そうした“常態”的で肯定的な貢献を評価する際の対象となる、周囲の状況の範囲をどのように設定するべきかということだ。ポストヒューマン文明の具体例が目の前にないので、ポストヒューマンの時代になると、どんな物や属性が〈常態〉的に肯定的な貢献を行うかは、はっきりとはわからない。そうなると、私が価値を論ずる際に仮定した、ポストヒューマン時代のいくつかの局面を取り上げるのが妥当かもしれない。たとえば、ポストヒューマンの社会だ。

弁証法的な制約はあるが、ポストヒューマンの社会を定義してみよう。弁証法的な制約を設定するのは、もし私が自分に都合よく「ポストヒューマン社会」を定義してしまったら、「ポストヒューマン社会」で一般に価値あるものは何なのか、という議論の信ぴょう性が失われるからだ。さまざまな任意の条件の下で異なる状況を設定し、その状況での〈一般〉に価値あるものは何かを知ったところで、大して面白くないだろう。ただし、ポストヒューマン社会を定義したからと言って、私の出す結論に中身がないことにはならないと思う。私がこのエッセイ全体を通じて考えたことは、ポストヒューマンを基準とする仮説の社会は、ポストヒューマンである住民のためのものだ、ということだ——現在の人間社会が、人間のためのものであるように³¹。ポストヒューマン社会は現代社会と同様に、その住民であるポストヒューマンに多くのアフォーダンスとチャンスを提供するだろう。私はこの仮説によって、これが最適なかたちで

のポストヒューマン社会の在り方であると予測するつもりはないし、ポストヒューマン社会以外ではポストヒューマンであることに価値はないと示唆するつもりもない。この仮説は、私がこのエッセイで擁護しようとしている主張の範囲を決めるための手段にすぎない。

反論：人類が蓄積してきた文化的な宝は、人類を超越した能力の持ち主にとっては魅力的ではないだろう。人間である間は楽しめたチャレンジも、ポストヒューマンの能力を獲得してしまうと、些細でつまらないものとなる。このことはポストヒューマンから、深い達成感という素晴らしいものを奪ってしまうだろう。

回答：複雑で繊細なものを評価できる能力が、簡潔なものを評価できないことはないだろう。シェーンベルクを評価できるだけの知識を備えた人でも、素朴な民謡や鳥のさえずりを楽しむことはできる。セザンヌの絵を愛する人も、日の出を見れば感動するはずだ。

たとえポストヒューマンが簡潔なものを評価できなかったとしても、ポストヒューマンは新たな文化的富を作り出すことで補うはずだ。仮説のポストヒューマン社会は、そのためのチャンスを提供するだろう(上記参照)。

何かにチャレンジすることがつまらなくなれば、ポストヒューマンはもっとチャレンジのしがいのあることを見つけるはずだ。ポストヒューマンの認識力を発達させることに理由を付け加えるならば、それは知的で面白いチャレンジをするチャンスを広げるためだと言えるかもしれない。人間の認識力の範囲でも、能力が高くなるほどに、取り組める知的プロジェクトの数は増え、その意義も高まるだろう。知性が発達すれば、知的な問題をよりよく解決できるだけでなく、まったく新しい意義のあることや創造的な活動に取り組める可能性が視野に入ってくるものだ。

反論：脆弱、依存、有限を感じることは、人生にとって価値あることであり、そのことが道徳面や精神面での人間的な成長を促す。

回答：ポストヒューマンもまた脆弱で、他者に依存する、有限の存在であろう。

ポストヒューマンもひとりの人間として道徳的、精神的に成長することができる。人間は拍車をかけられなければ成長できないかもしれないが、ポストヒューマンにはそんなものは必

要はない。道徳面、精神面で自発的に成長できる能力は、感情能力の一部と見なすことができるだろう。

反論：限界を克服するのに、努力や勤勉によってではなく、テクノロジーを用いようとすることは、自発的に才能を開花させることに失敗し、自分自身を認められずに自己嫌悪に陥っている証拠である³²。

回答：私はこのエッセイで、ポストヒューマンになりたいという願望を表現することの重要性については論じていない。また、そのような願望を持つことが、その人を悪い人間にするかどうか、本質的にせよ経験的にせよ論じてはいない。このエッセイの関心事は、むしろ、ポストヒューマンは良いことかどうか、我々にとってポストヒューマンになることは良いことかどうか、である。

反論：技術的近道によって入手された能力には、自己管理と自己犠牲によって入手される能力と同じ価値はない。

回答：ポストヒューマンの能力を容易に手に入れたとしても、その能力には極めて高い価値がある。この考えは、血と汗と涙を流してやり遂げれば、それだけ価値は高まる、という主張と矛盾するものではない。私は、ポストヒューマンになる最善の道については言及していない。しかし実際問題として、先進技術に頼らずにポストヒューマンになることはあり得ないだろう。

反論：オリンピックの金メダル獲得といった種類の目的が、もし不正行為などの不当な手段で達成されたのなら、その価値は下がるところか無効になるだろう。同様に、能力を備えていることの価値は、その能力の獲得の仕方にかかっている。ポストヒューマンの能力を適切な手段で獲得できれば、それは素晴らしいことだろうが、実際には人間に可能で適切な手段などない。人間がポストヒューマンの能力を獲得できる、いかなる手段も、そのような能力を持つことの価値を否定するだろう。

回答：オリンピックのメダル獲得のたとえ話は、誤解を招く。スポーツ競技の性格上、メダル獲得の価値はメダル獲得のプロセスと密接に関連している。このたとえ話で問題になっているのは、メダルの価値でも、メダルを獲得したことの価値でもなく、まぐれの入る余地のな

い公平な競争手段によってメダルを獲得する価値である。これ以外の目的には、多くの場合、当てはまらない話である。健康になりたくて医者にかかる時、健康になる価値が、健康になるプロセスに大きく左右されるとは考えないものだ。健康と、健康を享受することは、それ自体に価値があるのであって、どうやって健康になったかは別問題である。もちろん、健康になる手段の価値も大切である。手段それ自体がネガティブな(苦痛や不便など)場合もあるが、行動の結果の価値を評価する際は、目的達成の価値と同様に、その手段の価値も考慮するものだ。しかし通常は、手段の価値がネガティブなものだったとしても、その事実が目標を達成した価値を減じるものではない。

ひとつ例外があるとしたら、それは不道德な手段だ。極めて不道德な手段で目的が達成された場合は、その目的は〈汚されて〉、目的の価値そのものが下がることになるかもしれない。たとえば、ナチスの強制収容所の医師が成し遂げた医学的成果は、その手段ゆえに価値が低いか、価値がまったくないと見なすこともできるだろう。しかし、この種の〈穢れ〉は特殊なケースである^{註33}。間違った手段を用いなければならぬことは、目標を追い求めない言い訳になるかもしれないが、間違った手段が目的の価値を下げる理由にはならない。目的のポジティブな価値よりも、手段のネガティブな価値のほうが重大であることが理由だ。もしくは非帰結主義的な見解に立てば、結果の総合的な価値とは無関係に、ネガティブな手段を使うことは道徳的に許されないからだ^{註34}。

私が主張する価値は、ポストヒューマンの能力から導き出すことができるものであり、オリンピックの金メダルのような価値ではなく、どちらかと言えば健康の価値に近い。結果を汚すような(それどころか高い余剰価値を台無しにするような)不道德な手段に頼らないやり方では、人間はポストヒューマンの能力を獲得することはできないという考えは、非理論的で形而上学的で〈原則主義的〉である。結果を汚さずにポストヒューマンの能力を実現することがどの程度可能かはわからないが、この疑問は私のエッセイの範囲外である。したがって私の結論の暗黙の条件は、私が考えるようなポストヒューマンの能力はファウスト的^{註35}ではないやり方で獲得されてきた、ということになるかもしれない。

反論：ポストヒューマンはその才能で、大いに過ちを犯すだろう。優れた潜在能力が実現されて、有効に用いられるならば、素晴らしい人生を送るための役に立つだろう。しかし、潜在能力が浪費されたら、悲劇的な人生を招くだろう。そこそこの能力で幸せに生きるほうが、飛びぬけた能力を持ちながら不幸な人生を送るよりも、ずっと良いだろう。

回答：才能に恵まれた人間が、その才能を浪費する可能性があるからといって、嘆かなくてもいいだろう。ポストヒューマンの能力が人間の能力より無駄にされるかどうかはわからない。すでに述べたように、仮説のポストヒューマン社会は人間社会と同様に、その住民であるポストヒューマンにアフォーダンスとチャンスを提供するだろう。ポストヒューマンに潜在能力を無駄にする傾向があるのならば、それは内面的・心理的理由によるものだろう。人生を精いっぱい生きようとする点で、ポストヒューマンが人間に劣る必然性はない^{註35}。

12. 結論

私の主張は、①ポストヒューマンの存在様態は極めて価値が高い。②ほとんどの人間にとって、ポストヒューマンになることは良いことだろう、ということだ。

私はこのエッセイの大半を費やして、3つの人間の核となる基本能力——健康寿命、認識力、感情能力——について論じてきた。これらの能力を強化して組み合わせることができれば、私の論拠はもっと堅固になるだろう。独創的な努力と知的な成長を事実上無限に続けることの意義を悟れる認識力があれば、健康寿命が延びた人生は、もっと価値あるものとなる。さらに、生きることを楽しみ、精神活動を楽しめる感情能力があれば、健康寿命と認識力の価値も高まる。

このエッセイの「ポストヒューマン」の定義から導き出される結論は、つまらない話だが、我々は今現在はポストヒューマンではない、ということだ。また、何らかの明白な論理で、ポストヒューマンは人間のままではいられない、との結論を出すことはできない。いずれにせよ、この問題は〈人間〉という言葉の意味に左右される。〈人間〉の意味をもう少し幅広く解釈できれば、「ポストヒューマン」は人間の存在様態の一

種——私の考えが正しければ、極めて価値のある種類の存在様態——と理解できるだろう。

(訳:村上彩)

初出

Originally published in *Medical Enhancement and Posthumanity: The International Library of Ethics, Law and Technology*, vol. 2, 2009.

Editors: Bert Gordijn, Ruth Chadwick

ISBN: 978-1-4020-8851-3

Chapter: "Why I Want to be a Posthuman When I Grow Up" by Nick Bostrom, pp. 107–136 with permission of Springer Nature

訳出にあたっては下記に再録された版をもとにした。

Max More and Natasha Vita-More, eds.,

The Transhumanist Reader: Classical and Contemporary Essays on the Science, Technology, and Philosophy of the Human Future, First Edition. (John Wiley & Sons, Inc., 2013): 28–53 © 2013 John Wiley & Sons, Inc.

有益なコメントを寄せてくれた。次の人々に感謝申し上げる：ロス・ビートン、バート・ゴールディン、ガイ・カハネ、トビー・オード、デイヴィッド・ピアース、デイヴィッド・ロダン、アンダース・サンドバーグ、ジュリアン・サビュレスキュ、ハーロッシュ・シュロミット、エレナ・パティゴ・ソラナ。このエッセイの元となった講演は、以下の会合で開催した：the James Martin Advanced Research Seminar (Oxford, January 30, 2006), the Institute for Science, Innovation & Society (Nijmegen, February 21, 2006)。また、このエッセイは2006年に発表されたのち、次の書籍に収録された。Bert Gordijn and Ruth Chadwick, eds., *Medical Enhancement and Posthumanity* (Springer, 2008): 107-137。

- 1 Berkeley et al. 1897: 172.
- 2 このエッセイで用いた定義はBostrom 2003の論旨を反映したものである。まったく異なる「ポストヒューマン」の定義は、Hayles 1999などで用いられている。
- 3 この「平凡な価値」に関する見解を、適用された倫理の中立の原則の概念と比較されたい。寛容な自主性を尊重する原則は、医学の倫理において重要である。患者の自主性に対して敬意を払うことは、基本的な倫理原則である。しかし同時に、患者の自主性は中程度に重要な原則だと思う人もいよう。つまり、有益な経験則、健全な方針に基づいた原則、派生的な倫理原則であり、民主主義社会のさまざまな経験的事実に基づけば正しいことである——ただし、あらゆる社会において正しいとは限らない。適用された倫理における中立の原則の役割については、たとえば次を参照。Beauchamp and Childress 2001。
- 4 このエッセイは、個人の福祉に関するグローバルな評価——たとえば多様性、平等、公正な比較などの価値の評価——には触れていない。
- 5 人生の価値や幸福は、精神的体験や断片的な人生経験に付随して起こるものではないと考える。人生の価値とは、人生の充実度をもっと広範囲にグローバルに評価することを意味している。
- 6 健康で長生きする能力を持つことは、望ましい年齢で死ぬ能力を持つことと両立する。たとえば、80歳以上長生きすることを望むべきか迷っている人が、健康で長生きしたいと望んでも、何の不思議もない。ポストヒューマンの健康寿命は、健康で長生きするという選択肢を提供するが、いつの日かその能力をもう行使しないと決心することも可能なのだ。
- 7 医学研究に関しては、ハンソンが別の見解を示している (Hanson 2000)。
- 8 少なくとも1人の人間——ジャンヌ・カルマンという女性だ——は122歳まで生きた。カルマンは最晩年まで比較的健康を保っていたが、20代の頃に比べれば、体力(そしておそらくは気力)の衰えに苦しんでいたことは確かだ。122年間の生涯にわたって、健康的で活動的で生産的な能力を維持していたわけではなかった。
- 9 自殺に対する忌避感、死にたくないという願望よりも、自分自身を殺したくないという願望を反映しているのかもしれない。あるいは、死ぬのが怖いということなのかもしれない。
- 10 DSM-IV (American Psychiatric Association 2000)。
- 11 これは現実味にかける〈テレビ裁判〉のような議論だ。し

かし、死への恐怖が不合理な場合、死が身近な人々は、自分の余生の価値を的確に判断できないだろう。なぜなら、その判断は、不合理な恐怖の影響を受けやすいからだ。

- 12 この結果は基本的に、多くの慢性疾患で見られる (Ubel et al. 2003)。麻痺患者の態度と健康者の態度が異なっている原因は、健康者の怠慢——患者がどれほど自分の置かれている状況に精神的に対応しようと頑張っているかを理解していない怠慢にある (Damschroder et al. 2005)。
- 13 麻痺に関するたとえ話には、少なくとも不完全な点がある。健康寿命の延長が問題となる場合、我々が考察するのは、健康と活力が完璧に保たれた状態で長生きすることに価値はあるだろうか、という疑問である。しつて言えば、この矛盾は結論を補強する。なぜなら、不健康な状態で生き続けるよりも、健康な状態で生き続けるほうが、価値が高いからである。
- 14 Tsevat et al. 1998。次も参照のこと。McShine et al. 2000。方法論的評論については、次を参照のこと。Arnesen and Norheim 2003。
- 15 このことは、多くの人々が故意に喫煙のような危険な行為に従事している、という事実と合致している。このことが意味するのは、単に喫煙をやめられない、あるいは健康で長生きするより喫煙を楽しみたい、ということである。健康で長生きするなんて嫌だ、というわけではないのだ。
- 16 認識力を向上させたいという願望は、人間の合理性の一環である、と主張する人もいよう。この仮説については、本稿では考察しない。
- 17 米国の2003年の公的教育支出は、GDPの5.7パーセントだった (World Bank 2003)。
- 18 複雑な要因：もし、優れた能力は多大な努力をしなければ得られないとしたら、ある分野で極めて優れた能力を発揮している人々や、優れた能力を持ちたい願望が並外れて強いということになる。だから、優れた能力の持ち主がその能力のさらなる向上を願うのは、驚くべきことではない。高い能力を求める強い願望は、豊富な情報と知識に恵まれた結果ではなく、その人の元々の性格によるものだろう。
- 19 獲得した能力の本質的な限界効用は、一定なのか、減少するのか、あるいは高いレベルの能力の場合は増加するのか、その場合はどれくらい増加するのか——その判定は難しい。
- 20 Pearce 2004。
- 21 自分の主観に基づいた幸せを追求することは、多くの人々にとっては強い動機となるだろう——たとえ、幸せの追求に役立つとされる手段のどれひとつとして、非常に有効であるとは証明されていない (Brickman and Campbell 1971)。
- 22 DeGrazia 2005を参照。アイデンティティの問題が絡むと——それが人格の同一性の熟考に基づくものであれ、物語的な同一性に基づくものであれ——人間的な向上を目指すチャレンジは概ね失敗すると、デグレージアは主張する。もっともデグレージアは主に、私がこのエッセイで取り上げた能力強化よりも、もっと穏やかな強化を論じている。
- 23 これは、たとえ今日の人間心理の限界の範囲内であっても、心理学的に妥当な結果ではない。余命1日を残すだけの死刑囚の場合を例に取ろう。予想外の恩赦のおかげで、余命が40年延びたとする——つまり14610倍になったわけだ。死刑囚は喜ぶかもしれないし、啞然とするか、混乱するかもしれないが、人間として存在することをやめることはない。もし、自殺でもしよものなら、死刑囚

にとっては恩赦より惨いことだろう。

有限の命や老化は人間の特徴であるとしても(私はそれは思わないが)、この特徴と、著しく長くなった健康寿命とは矛盾するものではない。

- 24 非常に長生きして、しかも静的になったり、独りよがりになったりしないためには、精神的成長が続くことが必要である。
- 25 この説明には、普通の人の夫の(自分自身に対する誓い)も含めていよう。もし、普通の夫が考え抜いた末に、ポストヒューマンには絶対なりたくないと思い、ポストヒューマンの能力は決して発展させないと自らに誓っているとしたら、若いときの願望や誓いのために、ポストヒューマンになることは普通の夫にとって悪いことになったのだろう。
- 26 普通人がポストヒューマンにならないとしたら、それは自分にとって悪いことだから、という以外の理由があるのかもしれない。たとえば、本人にとってポストヒューマンになるのは良いことだとしても、倫理上の理由からポストヒューマンに成れない、ということもあるだろう。普通人にとってポストヒューマンになることが必然的に悪いかどうかは疑問だが、普通人にとって悪い結果をもたらす限りにおいて、倫理上の理由からポストヒューマンにならないことは妥当だということになる。
- 27 上記で論じた、性格に関わる価値論と比較されたい。
- 28 たとえば、現代人にとって、包括適応度を最大化する人生計画とは、不妊治療を行う病院にできる限り多くの精子を提供することだったりする。
- 29 ポストヒューマンの能力は、歴史が始まって以来、追求されてきた。最古の叙事詩『ギルガメシュ』(シュメール文明、紀元前約1700年)には、不死を求めた王が登場する。後の時代には、「青春の泉」が探し求められ、錬金術師は不老不死の霊薬を作ろうとし、さまざまな興義に通じた中国の道教の諸派は、自然の力をコントロールし、あるいは自然と調和することで、不老不死の肉体を手に入れようとした。また、さまざまな宗教では伝統的に、超自然のポストヒューマン的存在が重視され、待望されている。
- 30 著名な生物学者であるJ・B・S・ホールデンは次のように書き記している：「化学や物理の発明家は、常にプロメテウスである。火の発明から飛行機の発明に至るまで、偉大な発明で、神への冒瀆としてしられなかったものはない。しかし、化学や物理の発明が冒瀆なら、生物学の発明はさらに悪い。関心を持って見に来てくれる人がやっとな現れても、それは得体の知れない人物であり、しかも不自然で下劣な発明だと言われてしまう (Haldane 1924)。
- 31 仮説の社会の住人はポストヒューマンだけだとは思えない。
- 32 サンドルの評論 (Sandel 2004)と比較されたい。もっとも、サンデルが表出主義者の関心を持っているかどうかは定かではない。
- 33 ナチスの医師の例にしても、損なわれたのは(ドイツなどの)医師の業績であり、その業績の価値である。成果の価値は影響を受けないだろう。ただし、その成果を活用することに不快感を覚えたり、その成果がどのように達成されたかを思い出して心が痛んだり、遺憾に思ったりするのは、妥当なことだ。
- 34 我々は進化の起源を理由にして、現在の人間の能力の価値を否定することはない——たとえその起源が、人類が成し遂げた結果ではなく、暴力と虚偽と不当な苦痛にどっぷり漬かったものだとしても。今日生きている人々がこの世に存在できるのは、数千年にわたる戦争と略奪と性暴

力のおかげである。しかし、だからと言って、我々の能力や存在のあり様に価値がない、というわけではない。

たとえば、成果には肯定的な価値Xがあり、その成果を得た手段には否定的な価値Yがあったとする。そして成果と手段の〈有機的統一体〉にはそれ自体の価値Zがあり、この価値Zは否定的なものかもしれない。哲学者ムーアを支持する立場から見れば、この状況〈全体〉の価値は $X + Y + Z$ であり、Xが(-Yよりも)大きくても、全体の価値は否定的になることもあり得る(Moore 1903)。あるいはZは、 $X + (-Y)$ では計れないかもしれない。いずれにせよ、以上の立場と我々が置かれている状況は異なる。なぜなら、成果を得る方法が変化しても、価値Xは不変であると、このエッセイでは考えるからである。価値論的に言って可能であっても、議論の対象としているケースで、このような価値評価が通用すると考える根拠は不明である(この問題に関しては、ガイ・カハネからアドバースをもらった)。

- 35 ポストヒューマンが感情能力を強化すれば、大概の人間よりもモチベーションが高く、自分の潜在能力を優れたやり方で実現する能力も高いだろう。

訳註

- 1 人々が死ぬリスクを回避するために費やす金額を調べ、そこから1人の命を救うために政府が負担する費用を算出したもの。
- 2 ある財の消費量を増やしていったときに、最後に得られる満足感。多くの場合、消費量が増えると満足度は下がる傾向にある。
- 3 自分自身の人生に意味と目的を与え、心の中で発展していく物語の同一性。
- 4 子孫を直系・血縁を通じて、どれだけ残せるかということ。
- 5 ファウストはドイツの伝説上の人物。自分の人生に満足せず悪魔と盟約して自身の魂を引き換えに果てしない知識と現世での幸福を得た。ファウスト的という形容詞は、野心家が一時的な成功のために倫理を放棄する状況を暗示するために使われる。

参考文献

- American Psychiatric Association. 2000. *Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. Washington, D.C.: American Psychiatric Association.
- Arnesen, Trude M. and Norheim, Ole Frithjof. 2003. "Quantifying Quality of Life for Economic Analysis: Time Out for Time Trade Off." *Medical Humanities* 29/2: 81–86.
- Beauchamp, Tom L. and Childress, James F. 2001. *Principles of Biomedical Ethics*, New York: Oxford University Press.
- Berkeley, George, Sampson, George, et al. 1897. *The Works of George Berkeley, D.D., Bishop of Cloyne*, London: G. Bell and Sons.
- Bostrom, Nick. 2004. "Transhumanist Values." In F. Adams, ed., *Ethical Issues for the 21st Century*, Charlottesville: Philosophical Documentation Center Press.
- Bostrom, Nick. 2005. "The Fable of the Dragon-Tyrant" *Journal of Medical Ethics* 31/5: 273–277.
- Brickman, Philip and Campbell, Don T. 1971. "Hedonic Relativism and Planning the Good Society." In M.H. Apley, ed., *Adaptation-Level Theory: A Symposium*. New York: Academic Press: 287–301.
- Cohen, Jon and Langer, Gary. 2005. "Most Wish for a Longer Life—Despite Broad Aging Concerns." ABC-News/ USA Today Poll. <http://abcnews.go.com/images/Politics/995a1 Longevity.pdf>.
- Damschroder, Laura J., Zikmund-Fisher, Brian J., et al. 2005. "The Impact of Considering Adaptation in Health State Valuation." *Social Science & Medicine* 61/2: 267–277.
- DeGrazia, David. 2005. "Enhancement Technologies and Human Identity." *Journal of Medicine and Philosophy* 30: 261–283.
- Diener, Edward and Suh, Eunkook M. 1998. "Subjective Well-Being and Age: An International Analysis." *Annual Review of Gerontology and Geriatrics* 17: 304–324.
- Glannon, Walter. 2002. "Identity, Prudential Concern, and Extended Lives." *Bioethics* 16/3: 266–283.
- Haldane, John Burdon S. 1924. *Daedalus; or, Science and the future*. London: K. Paul, Trench, Trubner & Co.
- Hanson, Robin. 2000. "Showing That You Care: The Evolution of Health Altruism." <http://hanson.gmu.edu/showcare.pdf>.
- Hayles, N. Katherine. 1999. *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: University of Chicago Press.
- Johansson, Per-Olov. 2002. "On the Definition and Age-Dependency of the Value of a Statistical Life" *Journal of Risk and Uncertainty* 25/3: 251–263.
- Johnson, F. Reed, Desvousges, William H., et al. 1998. "Eliciting Stated Health Preferences: An Application to Willingness to Pay for Longevity," *Medical Decision Making* 18/2, S57–S67.
- Kunzmann, Ute, Little, Todd D, et al. (2000) "Is Age-Related Stability of Subjective Well-Being a Paradox? Cross-Sectional and Longitudinal Evidence from the Berlin Aging Study." *Psychology and Aging* 15/3: 511–526.

- Lewis, David. 1989. "Dispositional Theories of Value." *Proceedings of the Aristotelian Society, supp.* 63: 113–137.
- McShine, Randall, Lesser, Gerson T, et al. 2000. "Older Americans Hold on to Life Dearly." *British Medical Journal* 320/7243: 1206–1207.
- Moore, George E. 1903. *Principia Ethica*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, Kevin and Topel, Robert, 2003. "The Economic Value of Medical Research." In Kevin Murphy and Robert Topel, eds., *Measuring the Gains from Medical Research: An Economic Approach*. Chicago: University of Chicago Press.
- Nordhaus, William. 2003. "The Health of Nations: The Contribution of Improved Health to Living Standards." In K.M. Murphy and R.H. Topel, eds., *Measuring the Gains from Medical Research: An Economic Approach*. Chicago: University of Chicago Press: 263.
- Pearce, David (2004) "The Hedonistic Imperative." <http://www.hedweb.com/hedab.htm>.
- Sandel, Michael (2004) "The Case Against Perfection." *The Atlantic Monthly* 293/3: 50–62.
- Tsevat, Joel, Dawson, Neal V., et al. 1998. "Health Values of Hospitalized Patients 80 Years or Older." *Jama Journal of the American Medical Association* 279/5: 371–375.
- Ubel, Peter A., Loewenstein, George, et al. 2003. "Whose Quality of Life? A Commentary Exploring Discrepancies between Health State Evaluations of Patients and the General Public." *Quality of Life Research* 12/6: 599–607.
- Viscusi, Kip and Aldy, Joseph E. 2003. "The Value of a Statistical Life: A Critical Review of Market Estimates throughout the World." *Journal of Risk and Uncertainty* 27/1: 5–76.
- World Bank. 2003. "EdStats - the World Bank's Comprehensive Database of Education Statistics." <http://www.worldbank.org/education/edstats/index.html>.

ニック・ポストロム

1973年スウェーデン生まれ。オックスフォード大学哲学科教授。1998年、デイヴィッド・ピアースとともに世界トランスヒューマニスト協会を設立。2005年より、オックスフォード大学哲学科の学際的な研究機関である人類未来研究所の所長を務める。主な著書に『Global Catastrophic Risks』(オックスフォード大学出版、2011)、『Human Enhancement』(オックスフォード大学出版、2009)など。